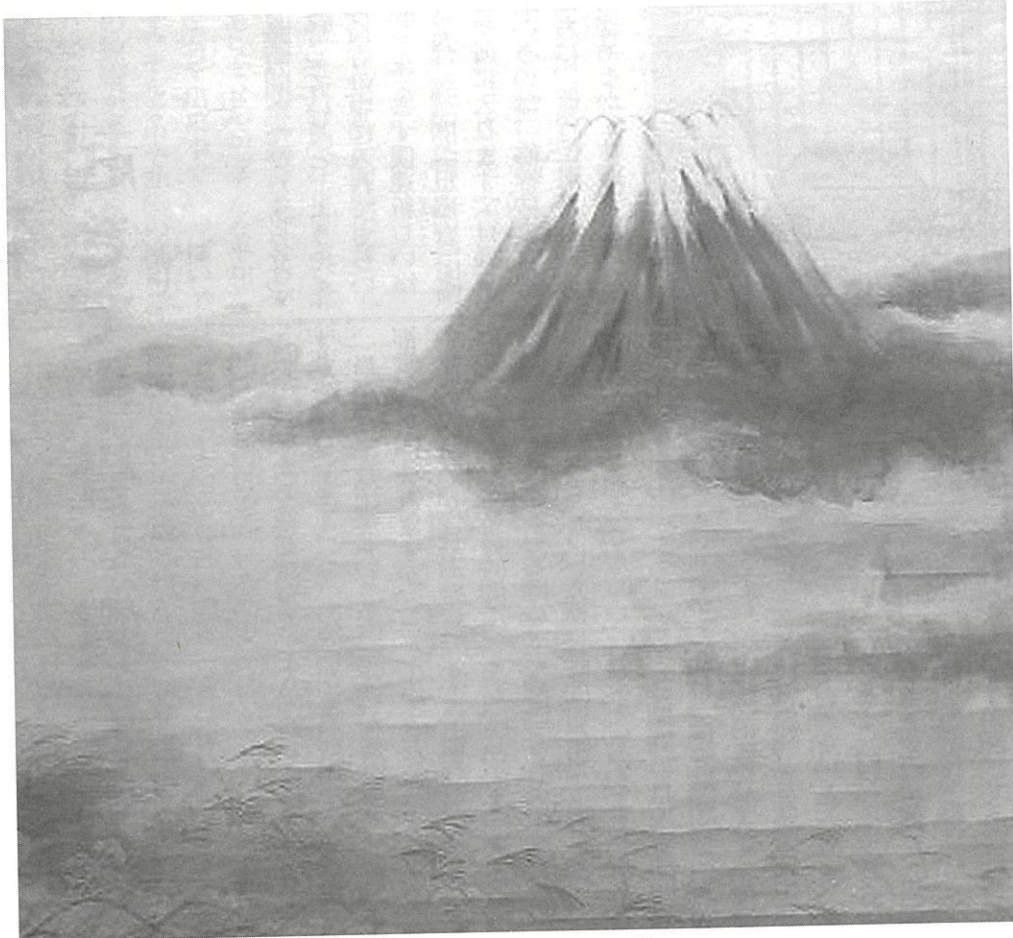


# 蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆  
近藤龍弘

〒940-0052  
長岡市神田町1丁目4番地10  
TEL.(0258) 32-2811

◆スタッフ◆  
小林国二 小林善秋 高橋潔  
加瀬由紀子 近藤マリ子 近藤善信  
後援・株式会社アサヒ  
印刷・(株)北越時報社



三輪超世画伯の富士山の掛け軸

早いもので今年の前住、安善寺廿六世雲巖見龍大和の十七回忌を迎えます。上の写真の絵は、三輪超世画伯の書かれたものですが、先住が正月になると書院の床の間に掛け、「この富士山は素晴らしいもので、安善寺の宝だ。お前の代になっても正月には必ずこの掛け軸を掛けなさい」と言われた事が思い出されます。

安善寺の中興開基様は、三輪九郎兵衛盛直（一六四〇寂）で、その因縁で安善寺の寺紋は、三輪家の紋である三輪『囀』となりました。また、三輪家十代、飛兵衛長泰（一八〇三年寂）の寄進によつて、坐禅堂が建立され、江戸時代後期においては地域の一大禅修行道場として、多くの修行者が坐禅弁道されたそうですが、残念なが

ら明治元年の戊辰の役の兵火で焼失しました。正月にこの掛け軸を掛けるのも、何かの因縁でしょうか。前住、師匠は八十六歳の生涯、一生が修行の日々であり、一日く、一刻くを精一杯大事に行き切った人生であつた様に思われます。師匠の遺徳（入滅に際して後人のために残す偈で自身の心境感想等が、辞世の語としてかかれています）は、『有山上山 横超淨穢 有河渡河 収放無礙』  
（山有れば山のほり おうちょうじょうえ 河有れば河を渡る しゅうほうむけ）  
（横超…よこさまに迷いの世界を超えしめる。淨穢…きよらかさとけがれ、善と悪、差別對待の相。収放…収は手に取る、放は手から離す、把住と放行、取捨無礙…他のものを拒否しないこと、自由、何ものにも

## 謹賀新年

今年も宜しくお願申上げます

翠巖龍弘

捉われず、自由自在であること）でした。

四苦八苦の教えの如く、人生には多くの苦しみ、悲しみ、辛い事、心配事、悔しい事、思うようにいかない事があります。

今なさざればなす時ぞいつ。君なさざればなす人ぞだれ

ご家族の皆さままでご覧ください



# 〔大本山總持寺 雲水日記 その二〕

## 起きて半畳、寝て一畳。

近藤 真弘

長時間ただひたすら立って待っていると、ようやく總持寺の中に入れてもらいました。まず僕達新しい修行者は一週間「日過寮」という所に入ります。日過寮というのは、修行に来た者たちに、修行に堪える精神力があるか試す所であり、

ここでは朝から夜までひたすら坐禅をします。当然食事も僧堂という坐禅堂の外単で食べますが、この食事というのが、日過寮において、もつとも辛い時間でした。僧堂で食事をとる際には「応量器」という、食器を使い坐禅を組みながらい

たきます。しかし、これがまた使用する際に細かい作法があり、ただ坐禅をしているだけでも辛いのに、そこで慣れない作法で食事をし、しかも間違えば大声で怒鳴られ、本当に食事の時間が嫌で、慣れるまでは、食べた気がしませんでした。

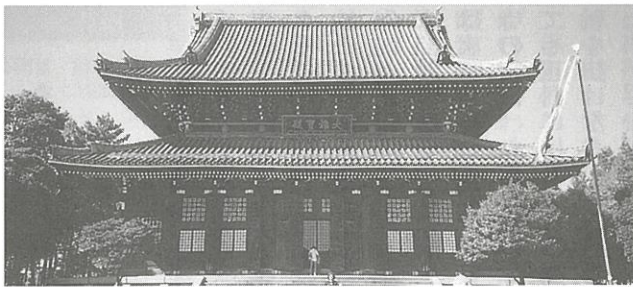


退董された板橋禪師様と。

一週間の日過寮期間の最終日、僕等は朝課、朝のおつとめ)の後、一人ずつ禪師さま(總持寺の住職)に相見し、お言葉をいただきました。そしてこの日、僕達を直接指導して下さる後堂・単頭・維那老師に挨拶に行き、これをもって正式に總持寺の「雲納」(修行者)と認められ、本格的な修行生活に入る事になりました。

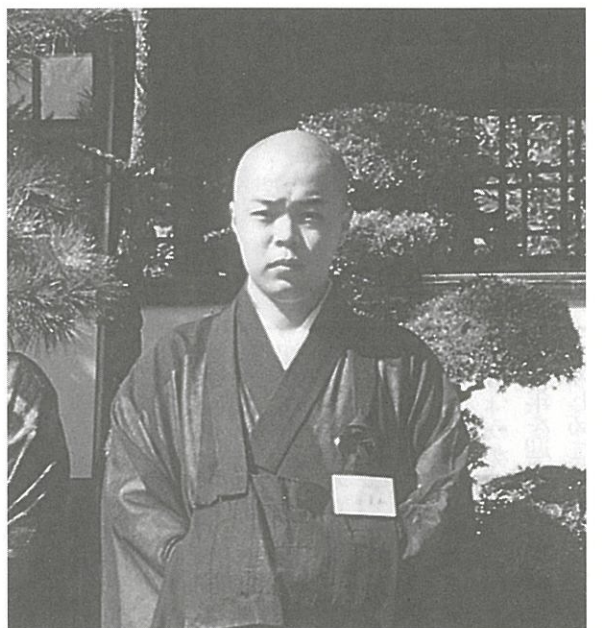
日過寮では、まだ正式に僧堂に入堂していなかったため、寝る時は畳の部屋に布団を敷いて寝ていました

が、正式に入堂した僕等は僧堂内に自分の場所(単)をもらいました。一人頭のスペースは畳一畳で、ここに布団を敷いて寝ます。起きた



大本山總持寺仏殿

ら布団を函櫃という単についている荷物入れに収め、そのまま洗面を済ませ、そこで坐禅になります。『起き



て半畳・寝て一畳』という言葉はここからきました。ここで總持寺での一日の流れを簡単に説明します。振鈴(起床時間)は夏場は四時、冬場は四時半です。起きたら十五分後に坐禅が始まるので、それまでに洗面等を済ませます。約四十分の坐禅が終わるとそのまま大祖堂(本堂)に移動して、朝課が始まります。ここまで終わると小食飯台(朝食)になり、その後、作務(掃除)が始まります。後は、薬石飯台(夕食)が始まる十六時まで法要・作務が続きます。十七

時頃から各自お風呂に入り、夜は学科または坐禅が行われ、二十一時に開枕(就寝)となります。日過寮を出た僕等新到はまず全員が例外なく「看読寮(鐘司寮)という所に入ります。ここでは、その日自分が行う事を當役という形で割振ります。看読寮の當役をおおまかにいうと、鐘司：鳴らし物(鐘太鼓)。担当淨人：食事の準備。水頭：風呂の準備。直堂：僧堂を看守等。以上のような當焼くがあり、各當役すべてに細かいきまりがあります。

自らを生かそうとするならば、他とともに生きることである。他を生かさずして、自らを生かすことはできない。



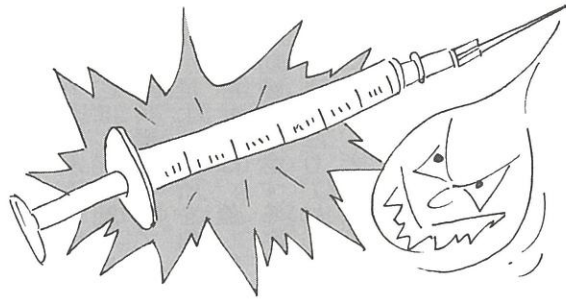
# 新年にあたり

小林 善秋

昨年の十一月二十七日に三条市で薬物乱用防止教育認定講師の講習会があり、私もあるボランティアの団体に所属している関係もあり、この講習に出席させて頂きました。薬物は世界を滅ぼす。世界各地で取締まりを強化しているがなかなか、うまくいっていない様です。

日本でも国、県、各市町村で薬物乱用防止の啓発活動を実施している組織が多くあり、それぞれ色々な方法でこの啓発活動を行っていますが、薬物に汚染される人が後を絶ちません。(特に最近では低年齢の利用者が増加傾向にある)

今、世界的に問題になっているテロ行為、イラク及び北朝鮮問題等、挙げればきりがありませんが、そんな平和を脅かす出来事ではないです。そんな中で薬物の乱用での被害が多くある事はあまり知られておらず、また、関心が薄いのが現状です。今回の講義を受け、改めて薬



物の怖さを知った感じで本当にこのままでは数多くの人が廃人になり、また、他人に危害を与えます。

こんな現状がますます増える事を考えると、我々が日常触れている世界的な報道ばかりに目を向けるのではなく、もっと身近に迫る問題にも、皆で取り組んでいかななくてはならないと痛感しました。

社会不況の中、自分の事でいっぱいだと思っておられ

# 何を思うかこの一年 高橋 潔

一年の計は元日にあり、新年を迎え密かに今年こそはと誓いを立てる。世の中、密かな誓いもさまざま、今年こそは結婚するぞ、今年こそは絶対高校入試で合格するぞ、こんな誓いは意気が上がります。今年こそは仕事を見つけたらといったのは不景気の余波。リストラにあった中高年だけのことかと思えば、今や高卒の若き世代にも当てはまるのは、なんと

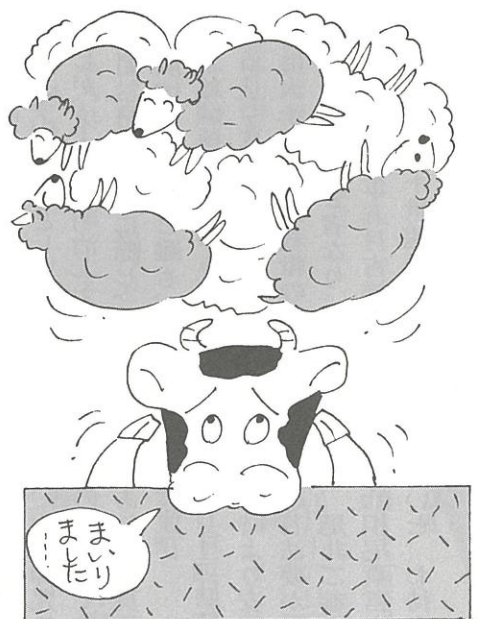
る方も多くいらつしやる事と思えますが、新年に当たり少しの時間を頂き、みんな薬物の乱用防止の啓発活動に参加し理解を頂き、一日も早く乱用者がなくなる様に薬物の恐ろしさを伝えて頂きたいと思ひ、この季刊紙には、あまり相応しい記事だとは思いませんが、あえて新年号での「新年にあたり」と言う記事の中で日頃より考えていた事を載せさせて頂きました。

ご協力をお願い致します。

も悲しいことです。いざ自分の一年の計はと言われれば、今年こそは日記を書く、今年こそはダイエットだ等々。しかし一週間もすれば今年も三日坊主であったかと特に嘆きもせず、所詮俺はお坊様にはなれぬ人物と納得してしまう意志の弱さのなせる技です。

新年は未(羊)年。羊にはどうも弱いというイメージがありすが、「群羊を駆りて猛虎を攻む」…力の弱い者も集合すれば強力となるという諺があります。大変な不景気で皆が元氣ありません。でも嘆いてばかりでは何も変わりません。日本中弱いなら、日本中力を合わせれば強くなる。そんな思いが今必要ではないでしょうか。

羊に関する諺をもうひとつ。「羊頭を懸けて狗肉を売る」…上等の肉(羊頭)を見せ、実はニセモノの肉(狗肉)を売る。見せ掛けばかりで中身がつまらないこと、ゴマカシの例えです。昨年どこかで同



じようなことがありました。それが発覚して取り返しがつかないことになってしまふ。この諺からの教訓となる話を見つけました。中国の唐の時代。ある和尚さんが街を歩いていたら、肉を買おうとしたお客が「良い肉をくれ」と言ったところ、肉屋の親父いわく、「うちには悪い肉など置いてない」と答えた。これを聞いていた和尚さんは悟ったという。つまり肉屋さんの商品はどれも牛や豚の命そのもので人間が勝手に肉に等級を付けているが、実は命には上下などない。人間は食べ物と思うと勝手に美味いの・不味いの、良いの・悪いのとランクを付けてしま

う。肉にしろ、魚にしろ、穀物にしろ全て自然の恩恵である命なんだと悟られたというお話です。世の中確かに何でもランクが付けれ、上だ、下だ。お金持ちだ、いや貧乏だ。頭が良いの、頭が悪いの。でも皆精一杯生きているんだと思うんです。落ちこぼれているのではなく、個性豊かに生きていくんだと思えば受け入れられることではないでしょうか。自分勝手に尺度を決めて差別をしてないか、そんなことを問いかねながら今年を過ごしてみようと思つてます。でも又三日坊主でしたかねと言われそうですが。



近隣寺院紹介

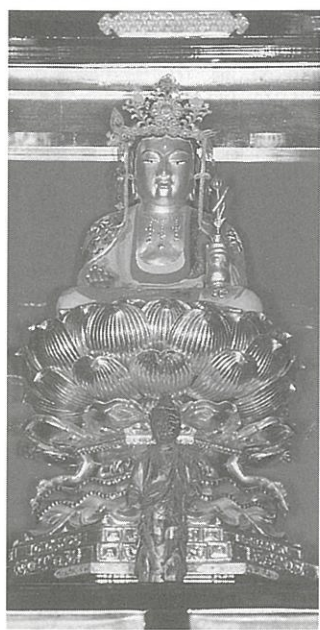
ご本尊は義経公の四天王の一人、亀井六郎重清の守本尊

# 祥雲山龍源寺 長岡市小曾根町

龍源寺住職 保高 順彦

龍源寺のご本尊は、源九郎判官義経公の四天王の一人、亀井六郎重清の守り本尊と伝えられている。重清が常に携えていた仏像で、高さ約八寸程の小さな木像である。本尊由来について記した文がある。

「本尊十一面観世音菩薩略縁起、当山に安置し奉る本尊十一面観音の由来縁起を尋ぬるに、尊像は仏士の名匠たる春日の御作にてして、源九郎判官義経公の重臣、四天王の一人なる亀井六郎重清の守り本尊なり。相伝う重清の祖先は、甲斐の国司に任せられ武勇絶倫の豪傑なりき。当時武蔵野



に三つ目の怪獣現れん人畜を悩ませしかば、庶民おのずから土地を離散し広野茫茫数十里に亘る。時の帝、天智天皇深く震襟を悩まし給い、甲斐の国司に是が退治を命ぜらる。国司は直ちに勅命を奉寺じ、士卒百騎を率いて武蔵野に至り、平常尊信する所の十一面観世音菩薩を祈念し、兼ねて春日の弓法を行じ、遂に其怪獣を亡ぼし屍ほ地中に埋め、永く其禍根を絶てりと云う。是より此所を亀井戸の里と称せしは、蓋し亀井家の功績を記念する名称に外ならざるなり。にして事上聞に達し、天皇深く壽賞



絵・禅道泰庵

し給い、三つ目の紋幕を下賜せらる。斯くして亀井氣累代十一面観世音菩薩を尊信し、奉仕怠りなかりしが、六郎重清は更に此尊像を得て、頂戴奉仕怠りなかりしが、故ありて源九郎義経に侍之、文治三年義経都を落ち延び、奥州下向の時にり重清も亦別れを惜しみて随伴し、主従山伏の姿に交じ遠く北海の波濤を越えて、其の足跡を晦ませしを以つて、重清の子弟は、父を慕い其の尊信する所の十一面

観世音菩薩を背負い奉りて遠く越後に漂泊し、二十村郷なる小松倉の地に落ち着き、一族皆此処に帰農して一寺を建立し、善心寺とけ数世の間奉仕しぬ。斯くて慶長年間一夜靈夢に感じ、尊像を守護して高波の荘に移住し、彼の亀が井の地に居住せるが故に、終に人呼んで村名と為すに至れり。雨来連綿子孫相統して、我開祖天室和尚(乙吉龍穩院六世天室称盛)の龍源寺を開創せらるるに及び、其の高徳を慕い、祖先

## 吒枳尼真天の真言の願い

季刊第四号「安善寺火防

稲荷吒枳尼尊天略縁起」で、安善寺のお稲荷様は豊川稲荷吒枳真天様を分霊して頂いた由を紹介致しました。『豊川閣妙嚴寺略縁起』によりますと、妙嚴寺本尊は、寒巖禪師伝来の千手観音菩薩を安置し又、鎮守として寒巖禪師御感得の善神、豊川吒枳尼真天を詣り、この善神は通称豊川稲荷と

以来尊信し且つ重清の得てし尊像を寄付して、本尊を崇むるのみならず、天智天皇御下賜の三つ目紋幕及び六郎重清が背負い来りし白桐の笈箱は、当山の什宝として伝来せしが、不幸にも明治二十年六月二日の火災に際し、遂に灰燼に帰せしと雖も、唯り本尊薩垂の尊像のみ無事なることを得たるは、是れ偏えに大士百年来の救世の妙智力と仰ぐべき者なり。千時明治四十五年五月吉祥の日龍源寺二十世遠孫比丘天靈德苗謹で志るす」。

呼ばれ、幾多の靈験を現じ、福德の神、抜苦与樂の神として広く崇仰せられ今川義元、織田信長、豊臣秀吉、九鬼嘉隆、徳川家康、大岡忠相、渡辺華山、有栖川宮熾仁親王等は熱心な帰依者であつたそうです。因に吒枳尼真天御神示の真言「唵尸婆佉尼黎佉娑婆訶」の要約は、「比の神咒を唱える時は、吾が真心は何処までも通じて、其の心は正明なる戒力の依り、悪事災難を除いて、福德智慧を得、苦を抜いて樂となし、悲しみを転じて喜びとなすことが必ず成就する」という意であり、比の神咒こそ吒枳尼尊天の全生命であり、大精神であり又、真誓願であるそうです。

今年の初午は二月二日巨です。午前十一時より安善寺稲荷堂で大般若法要が勤まりますので、是非ご参詣頂き、一緒に吒枳尼真言をお唱え頂きたいと、お待ちしております。



# 新調なつた器での

## 成道会(十二月八日)のお齋

近藤マリ子

「久々にお料理を」と言われ、いとも簡単にお返事したものの頭の中では口、漠然としておりました。そんな折、昨年暮れの成道会でかねてから念願だったお斎用の器を新調致しましたので、今回は安善寺の法要の時などにお出しするお料理を紹介します。

### 「煮物」

たくさん煮るので、昆布と鰹節でいっぱいだし汁を作っておき、前日に煮ておきます。

#### 「材料」

がんもどき・ぜんまい・大根・椎茸・人参・絹さや。がんもどきは熱湯で油抜きをして、だし汁・味醂・醤油で煮含める。ぜんまいは茹でては採み茹でては採みを三、四回繰り返してもどし、だし汁・味醂・醤油で煮含める。椎茸は戻してよく絞り、だし汁・酒・砂糖で煮含める。大根は面取りをして米の

とき汁で竹串が軽く通るまでゆで、ゆで上がったそのまま湯止めする。だし汁に入れ煮立ったら椎茸の残り煮汁を入れて、ひとにたちしたら火を止め一晩置く。

### 「白和え」

#### 「材料」

春菊・菊(おもいのほか)ぜんまい・柿・豆腐・白胡麻。春菊は茹でて二センチ位に切り、良く絞っておく。酢を少し入れた水によく洗った菊を入れて火にかけ、沸騰したらざるにあげ

ゆがき流し水でさらすと色良くなる。

弱火にかけ、鍋をゆすりながら香ばしくいり、すり鉢にあけて熱いうちにすりつぶす。油が出てねっとりしてきたら、しめておいた豆腐を入れ、ごまとよく混ぜ合わせ、混ぜたところに砂糖・塩を加え味を整えて下ごしらえしておいた材料を入れ混ぜ合わせる。



良くほぐしておく。

ぜんまいは前記の要領で戻し、だし汁・味醂・薄口醤油で下味をつけ一晩置いておく。

柿は皮を剥き、小さく切っておく。

### 「お浸し」

#### 「材料」

ほうれん草・黄菊。ほうれん草は茹でて二センチ位に切り、良く絞る。乾燥した黄菊を熱湯でゆがき、ざるにあげてよくほぐしておく。

### 「けんちん汁」

#### 「材料」

大根・人参・こんにゃく・里芋・牛蒡・豆腐。大根は薄いいちよう切り人参は乱切り。

こんにゃくは手で小さくちぎる。

里芋は乱切りして塩ひとつまみ入れしごいて、よく洗っておく。

牛蒡は削ぎ切りし、水につけてあく抜きをする。

鍋に胡麻油を入れ、こんにゃく・大根を炒め、大根がしんなりしてきたら、だし汁・人参・里芋・牛蒡を入れ出てくるあくを取りながら煮る。中の材料が柔らかくなったら、酒・味噌・醤油で味を整え、豆腐をちぎって入れる。豆腐が上に浮いてきたら火を止める。

### 「漬物」

#### 「材料」

かぶ・胡瓜・きやべつ・紅花。かぶ、きゆうり、きやべつを食べやすい大きさに切って塩と洗った紅花を入れ一夜漬けにする。

## お別れ

(平成十四年九月十日〜十二月五日)

佐藤貞一様 九月十六日寂

長岡市表町

林 敏江様 十月十四日寂

長岡市水道町

難波一保様 十月十七日寂

長岡市希望ヶ丘

小田チヨ様 十月十九日寂

長岡市東栄

福島啓三様 十月廿二日寂

長岡市袋町

村山吾朗様 十月廿四日寂

長岡市中島

小林健一様 十月廿五日寂

長岡市四郎丸

小幡貞一様 十月廿六日寂

長岡市中島

近藤八重子様 十一月百寂

長岡市台町

石川リト様 十一月廿六日寂

長岡市浦瀬町

ご冥福をお祈り申し上げます。





みよりより♡☆

やなぎみのりちゃんよりいただいた和尚さまの絵です。

**読者からの  
便り**

**お彼岸になると思い出す**

長岡市●佐藤 綾子

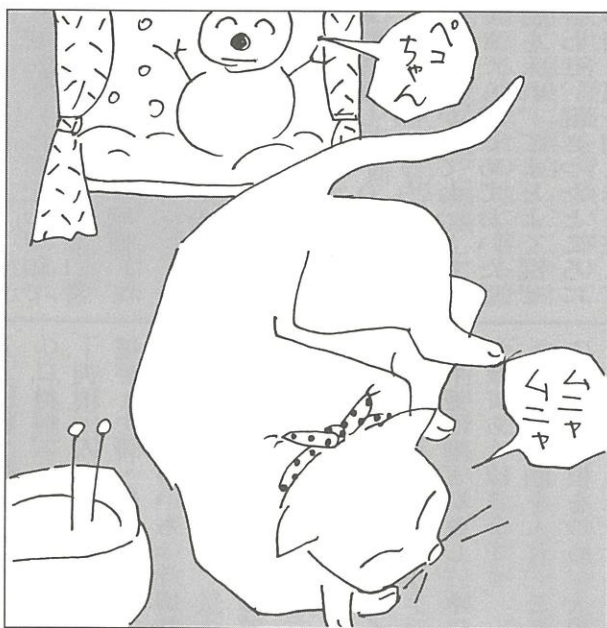
お彼岸になると思い出すことがあります。亡き夫は先代方丈様に頼まれて、十年ほどお寺の行事の時の受付のお手伝いに寄せてもらっておりました。

普段の行事の時のお包みは、普通に氏名を書いておいでになるのに、お彼岸の

回向袋になると、難しい漢字を崩して戒名を書いていらつしやるので、読むことができず何とかまねをして書いていたようです。

さすがに方丈様はご立派で、すらすらお読みになると云って感心しておりました。この度、夫の戒名の解説をお聞きして、有り難いことと感謝しております。

お彼岸に回向袋を持ってお詣りに寄せていただいたり、戒名を書いておいでになる方のお気持ちもよく判りました。  
(合掌)



ペコちゃんを楽しみです

東京都●平岡小夜子

朝夕涼しくなり秋らしくなりました。季刊誌をお送りいただきうれしく思っています。

今年の暑い夏は少々バテましたが、何とか元気に過ごせました。皆様も元気のことと存じます。

私は、ペコちゃんのひとりごとを大変楽しみにしています。猫を通して家族の様子を伺うことが出来てうれしく存じます。

いつもご無沙汰して申し訳ありません。皆様様もお体を大切に。

**初めてのマジック**

長岡市●板山 絢子

主人が亡くなった時は本当にお世話になりました。ありがとうございます。

二階の八畳のあまりの汚れに、ベットその他処分し、化粧直しをしました。その時、驚いたことは、(大工さんの話)柱の中、天井の板の中、煙草の煙が入り、天井の板からはかなりのヤニが出て来た事です。私には、初めての一つのマジックでした。



# おせちバイキング

加瀬由紀子

大晦日、お正月と続く非日常的長期休暇を楽しみにしていない人はまずないだろう。子どもも大人も、時代や国（西洋ではクリスマスに当たる）が変わっても待ち焦がれる連休である。

3年前まで我が家では、新年をいつも旅先で迎えていた。そして年賀状を書いたのは、滞在先のホテルでの夜の作業としていたので、「今年はこの消印かな」などと友人達の年賀状観察に貢献もしてきた(?)。

今や都心で暮らす大学生の娘と、連れ立って出かけることもなくなってしまうが、長期の休暇を取れない私にとっては、純粹な旅に費やせる貴重な日々であった。

唯一のネックは、この期間のツアー料金がめちゃくちゃに高い点である。必然的に航空チケットと宿泊のみ購入し、他はフリータイムという設定か、格安ツアーを探しての出発となる。

それでも通常より高価なので、いかに機動力を発揮して元を取るかという、さもしい下心が情けない。

国内のホテルでは、人手不足解消と年末年始の宿泊客の楽しみにと、二が日はおせちバイキングとするとおせちが多い。そのせいか、彼女はバイキングの達人親子は、だ、と信じていたらしい。一つおきに皿に取り全く違った種類をテーブルに並べ、全て半分ずつ食べてゆくのであるが、効率のよい反



面、一方が嫌いなモノが重なる場合もある。さらにこの方式でゆくと、ごはん、おかゆ、パン数種、雑煮と主食も並んでしまいすぐに満腹状態となるのも哀しい。最悪はローマのホテルの暖房も効かないレストラン。このバイキングは、三種類のパン。バターとジャムが二種類、飲み物4種類（ジュース、ミルク、コーヒ、紅茶）。バイキングの達人親子はさすがに絶句した。忌まわしいその名も「ポロミーニホテル」。ツアー

# 新たななるページ

小林 国一

新年明けましておめでとございます。

と言っても広報委員会としては本来喪中の年初めであります。今や故安藤委員長が姿を見せなくなつてから広報紙面を作る作業が困難になつてきました。安藤委員長に須らくお任せの頼りきり

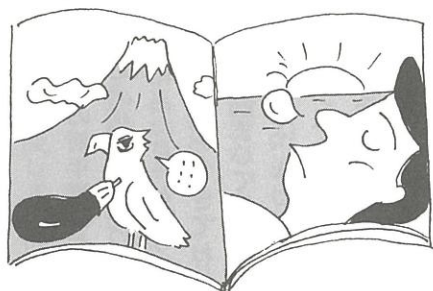
参加者は口々にぼろくそホテル、とののしつたことは言うまでもない。このツアーのおまけはまだある。

ヴェネチアの悪臭漂う運河脇のレストランでは、イカ墨スパゲッティのマズさ。外出禁止令の出たフィレンツェの大晦日。戒厳令ではなく年が改まる頃、窓から古い家具を投げ捨てる恐ろしい風習があり、死者も出るという。新春の楽しい旅行を計画している皆様、格安ツアーは避けるのが賢明です。バイキングの達人親子は、初めて我が家でのおせち料理を満喫する予定です。

であったからです。広報委員の皆様方が優秀なだけに何とか乗り越えてはおりますが、ネタ尽き状態でマンネリ化の憂き目に遭いそうです。

この紙面は老若男女誰でも参加できる素晴らしい紙面なのです。新年にあたり読者の皆様にお願ひ申し上げます。是非とも参加をして下さい。投稿を心待ちにしております。

新年早々愚痴では良くないので気分を変えて独り言を…。ある本を読んでいた「善をなすならあくまでもやりぬく。そうでなかつたら、せつかくの善も役に立たぬ」と。国の利益になることなら、一身の生死など問題とするに足りない。と言う一節を目にした。今の世の中何を信じていれば良いか判らないだけに、小泉首相もこの心境かと思つた次第です。昨年問題山積であっただけに、今年も様々な批判



を受けての舵取りに大変であるうが、私心なくあるべき姿を求めて突き進む覚悟は一国の首相も我が広報委員も同じ！ だと思ふ。皆様にはこれからも応援宜しくお願ひしたい。

ところで初夢見ました？ 一富士二鷹三茄子！ 富士のように気高く、鷹のように勇敢に、千に一つの無駄なく花が結果する茄子のように志をまつとうする。こんな夢が見れたら最高なんです。



# 初めての入院



只今、点検中!

夏の暑さの後遺症でしょうか、それとも歳のせいでしょうか、食欲がまったく無くなってしまいました。話すことが出来ない私にとっては、お母さんに意志を伝えるのは大変な事なのに、さすが、大事に到らない内に「ペコ、どこが悪いみたい食事をやっても後ずさりして

食べないわ」と言って私は病院に連れて行かれました。結果は極度の脱水症状と診断され点滴のため、一晩入院と言う羽目になってしまいました。獣医さんも看護婦さんもとっても良い人でしたが、やはり家ほど良い所はありませんね。最近、さくらも訓練を終

え帰って来たせいもあり、おとなしくしていたら「ペコももう障子破らないから」なんて声が聞こえ、客間と本堂の障子がすっきりきれいになりました。

訓練を終えたさくらは私の事を全然追わなくなったので、以前のように夜の点検に家の中を一回りしに行きましたら、私の通り道が全部塞がれているではありませんか。翌朝、お客様の準備のために客間に行つたお母さんの「大変！ペコが五ヶ所も破ったわ！」と大きな声が聞こえて来ました。いくらなんでもこれはひどすぎるではありませんか。私もこれくらい自己主張しなければ忘れられてしまいそうです。でも、そんな私の気持ちをお母さんも叱りもせず「ペコの道をあげなかつたから」

## ペコのひとりごと

え帰って来たせいもあり、おとなしくしていたら「ペコももう障子破らないから」なんて声が聞こえ、客間と本堂の障子がすっきりきれいになりました。今年のお正月は去年のお正月と違い、賑やかな年明けになりました。本山に修行中のお兄ちゃんも今年は二年目のお正月なので、三日が日が終わつたら何日かお暇を貰えるとかで、この季刊誌が皆さんの所に届く頃には私と同じで「家が一番いいね！」なんて言っている頃かも知れません。嬉しいような住職の顔が想像出来るようです。

**編集** 季刊紙「蔵王山安善寺」新年号が丁度、第二十号と言う節目の発刊に当たり、第一号(平成十年三月)より五年が過ぎ、年月の流れの早さに、ただ驚くばかりである。振り返ってみると二〇〇二年は異常な天候が続いた。春が短く、すぐ暑い夏が来て、秋が短く、紅葉を楽しむ暇もなく、例年になく早く雪が降り生活のリズムが多少ではあるがバランスを失った様な気がする。

また、安藤編集長が亡くなられ、第十八号は安藤編集長を偲んでと言う特別号も発刊しました。現在もまだこの季刊紙の発刊に対しては、全面的にバックアップして頂いており感謝しております。

私もこの新年号においては、この編集雑感の他に「新年にあたり」と言う記事の担当が回ってきており、今、頭を悩ましております。「愚痴る事は、体に悪く、前進ではなく、後退になってしまう。気をつけなくては」。

ともあれ、季刊紙の読者の皆様方からの投稿が数多く集まれば、我々も記事の担当が少なくてすみ、本当に助かるのですが、(自分勝手ですみません)そんな意味も含めまして、多数の投稿をお待ちしておりますのでよろしくお願い致します。

そして皆様方にとって今年が最良の年である事を願っております。

**お便り原稿用紙**

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事の仕事や疑問(編集部や住職がお答えします)など。
- 嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

(小林 善秋)

第二十一号、春号は平成十五年二月十日(月)発刊予定です。